まちむら発見②

人と自然とアートの融合

福岡県朝倉市　共星の里

福岡県朝倉市黒川で過疎化により廃校になった小学校を利用した『共星（きょうせい）の里（さと）』は、黒川ＩＮＮ美術館・メモリアルサウンドルーム・アートワークショップ・黒川ＩＮＮレストランを柱とした、体感型のアート空間。共星の里は造語であり、互いの違いを認め合いながら独自性を生み出し、共に星のように輝こう！との願いが込められている。

豊かな自然が広がる山里で『時には自然と向かい合い、時にはアートと語り合う。』『人と自然とアートの融合』『心をゼロに戻せる場所』『２つのソウゾウリョク（想像力と創造力）を高めよう！』を理念に、【黒川ＩＮＮ美術館】では２０００年の開館以降年間４～５本計１２０本以上の国内外のアーティストによるオリジナル作品の現代アート企画展やワークショップ・イベントを開催。他にもアートセミナー・地元農家との連携・グリーンツーリズム・レジデンス・国際交流など、やれることは無限大との想いでゼロから生み出すことを楽しみながら24年間活動を続けている。

【メモリアルサウンドルーム】では、約１２０年前のエジソンの蓄音機の生音をはじめ、明治・大正・昭和の蓄音機の懐かしい音が聴ける子どもたちの貴重な学習の場となっている。幼児から高齢者まで楽しめる石ころ・Ｔシャツ・段ボールアートなどの体験ができる【ワークショップ】では、様々なアートを創作する機会を提供するほか、コンサートや地元と連携した農業体験など多彩な活動を展開し、リピーターも増えた。

また、「多様性を認め合えるのがアートの力・アートには障害の壁はない！」という思いから、開館当初からアウトサイダーアートの先駆けのオランダ・ヘーレンプラッツの作家を招聘し展覧会を開催。その障がい者アートの作品の展示活動も広がり、平成15年、16年、18年にアート・福祉・観光の枠組みを超えたムーブメントにと、地元の原鶴温泉街の各旅館・公共施設に障がい者施設に所属する作家の作品を展示する「エーブルアート展IN原鶴」を開催。アートコミュニティを生むきっかけとなった。この24年間、老若男女・国籍を問わず芸術家や表現者の活動の場を提供し幅を広げ、若手の発掘や育成・学生の体験学習の受け入れ、障がい者の芸術活動の発展にも尽力してきた。

懐かしい木の温もりを感じる木造の旧講堂の【黒川ＩＮＮレストラン】は、癒しのアート空間となっており、四季折々の地元の食材を使った食事が楽しめるレストラン及び作家の作品が気軽に購入できるギャラリーとして親しまれ、地域のお祭りや直会・敬老会・同窓会・シンポジウム・コンサートの会場としても使用されている。活動を続ける中で全国的にメディアや公的機関にも認知されてきた矢先に、平成29年の九州北部豪雨においてインフラが全て寸断され集落は孤立、死者も出した。当館も濁流が流木や巨石と共に校庭を襲った。あわや校舎にも…と思われたが、その危機を救ったのが、校庭に設置していた約８トンの巨体な鉄製のオブジェ。濁流に押されながらも玄関前にて土砂をせき止めてくれた。甚大な被害を受けながらも多くのボランティアと有志皆様のご協力により半年間の臨時休館を経て翌春３月１日には再開を果たした。

この豪雨災害で校庭に平成７年閉校の時に埋められ

ていたタイムカプセルが流されたが、10キロ先の下流のダムで発見され、かつての在校生と家族たちを全国から呼びよせ当時の校長先生たちと当館で感動的な開封式を行った。また、被災した親子を招待しハリウッド映画「ミニオン」シリーズも手掛けるアメリカのストーリーボードアーティストによる制作過程の講義を開催するなど、被災者を元気づけ、地域の活性化を図り、被災地復興に大きく貢献した。

その後、九州大学ソーシャルアートラボと協力し、災害で山から崩落してきた巨石をそのまま配置し復興ガーデンも共創。この地で縄文時代から営みがなされていたとされる遺跡が新たに発見され、外国との貿易が裏付けられる品々の出土、英彦山の座主として中世時代には天皇家から皇子が迎えられ250年間、黒川院が置かれるなど山岳宗教が盛況を極めるもその後衰退、いわゆる栄枯盛衰を繰り返した地だということが判ってきている。その重層性に着目し、「場」が持っている可能性をアートでとらえ被災地に光を当て続け、海外からのインバウンドや徐々に客足も戻りつつある中でコロナ禍を経て、表現すること・人々の心に寄り添うこと・アートの灯だけは消さない！との想いで活動を続け、発信し続けている。

その地道な活動が多方面より認められ、2021年度に第29回福岡県文化賞（社会部門）を受賞した。自然災害に遭い、その後再起を果たしたこの地に畏敬の念を持ち、四季折々の豊かな自然が広がる山里から都市部へ向けて発信することで、アーティストを結び・互いを認め合い、交流が生まれ、互いに触発され出会いと創造の灯の連鎖が膨らみ、またその灯が観た者の心の活力となる光を与え、その光が四方八方に広がりそれが循環し再生し続けることを目的として、昨年にはここ朝倉市黒川から九州をはじめ全国・世界の方々に発信し、活動の輪をさらに広げていこうという企画をもとに自然を題材にした作品展やアートセミナー、コンサートを開催。

校庭に設置していた約8トンの鉄製オブジェが九州北部豪雨大水害の濁流の土砂を防いでくれた。また、災害で山から崩落してきた巨石をそのまま配置し復興ガーデンも共創

被災した親子を招待しハリウッド映画「ミニオン」シリーズも手掛けるアメリカのストーリーボードアーティストによる制作過程の講義の様子

また、東京と福岡の作家25名による多彩な作品の交流展、さらには近隣施設と連携を取り3会場に作品を散りばめた障がい者アート展も開催。コロナ禍の中で点を線で結び朝倉を巡ってもらいながら、アートを切り口としてそれぞれの顧客を共有しながら新規の顧客を増やし、ゆっくりと作品を楽しみ・刺激を受けながら朝倉の地を満喫してもらった。そうした活動が朝倉への新たな切り口となり外部からの移住者も増えてきている。

日本の原風景が広がる「山里」と「現代アート」という対極にもあるようなコンテンツの結びつきをあらためて感じて頂き、また独自のアート・文化を見つめ直すと共に新たな発見・体感・発表の場を設け、ときには活動維持に必要な場の提供をし、来館者・スタッフ・アーティスト・地元住民・関わる全ての人の心にエッセンスを投げかけ、廃校でやれることは無限大!!との思いを胸に持ち、ゼロから生み出すことを楽しみながらここに根をはり続けています。

（共星の里副代表　尾藤悦子）